



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第 27 回 日本語教育方法研究会 仙台国際センター 2006 年 9 月 23 日 (土)

会長 才田いずみ

今回は、東北大学大学院文学研究科言語科学専攻のご厚意により、「言語研究者・言語教育者養成プログラム（平成 17 年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ事業）」との共催という形で、第 27 回研究会を開催する運びとなりました。是非とも多数の方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

TABLE 1 第 27 回開催について

日 時 :	2006 年 9 月 23 日 (土)
会 場 :	仙台国際センター
開催委員 :	名嶋義直・才田いずみ (東北大学) 高橋亜紀子 (宮城教育大学)

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:00	発表者受付, ポスター貼付	1:40	講演
9:30	一般受付	2:10	口頭発表開始
10:00	開会の挨拶	3:10	ポスターセッション開始
10:05	会の進め方説明	4:40	講評
10:10	口頭発表開始	4:50	次回開催委員挨拶
11:10	ポスターセッション開始	4:55	閉会の挨拶
12:40	昼食・休憩	5:00	後片づけ
		5:30	懇親会

【参加方法】

事前申し込みは必要ありませんので、直接会場にいらしてください。

懇親会 (会費 3,000 円) にも是非ご参加ください。

懇親会場：仙台国際センター内 ラ・フォーレ

【プログラム】

【午前の部】

●口頭発表（5件）

1. 発話動機を高めるシミュレーション活動「一日ツアー説明会」

内海由美子・黒沢晶子（山形大学）

本稿は、日本語初級コースの修了時に行うシミュレーション活動の実践報告である。この活動は、学習者が旅行会社の社員として「出身地をめぐる一日ツアー」をデザインしスライドやパンフレットを作成し、大学内外からお客さんである聴衆を招きプレゼンテーションするというものである。シミュレーションという活動形態をとることで、①発話に対する動機が高まり発話内容を深めることができる、②使用する言語形式のバリエーションが広がり定着が図られるとともに敬語使用の場面を創出できる、③聞き手の動機が高まり真のコミュニケーションのきっかけとなる質問を聞き手から引き出すことができる等の効果が観察された。課題や準備時間を変更することで、さまざまなレベルで実施可能な活動である。

2. 談話の展開を意識した定義文の指導-語順の原理を利用した試み-

生天目知美（筑波大学大学院生）

定義文には定義される語とその意味内容が含まれるが、文レベルではどちらを先行させて提示しても文法的に正しく、命題内容も変化しない。では談話で用いる際にはどちらの語順の文を選択すべきだろうか。このような指導上の疑問から談話展開と語順の関連性に着目し、語順の原理（砂川 2005）を利用した文法・作文指導を試みた。語順の原理とは聞き手の情報処理にかかる負担から語順を決める原理であり、無標の語順は関連する情報が近接しており聞き手の負担が少ない語順である。本稿では無標の語順に注目して定義文の指導に応用した。指導後の学習者の作文を観察したところ、関連する情報を近接させて談話展開をスムーズにする効果が認められた。しかし一方で情報の近接性という局所的な分かりやすさに注目するあまり、談話全体の構成パターンが見えにくくかえって不自然な作文もあった。談話全体の構成と局所的な情報の近接性をいかに指導するかが課題として残った。

3. 東北大学の多文化クラス

押谷祐子（東北大学）

本稿は 2005 年度後期、2006 年度前期における東北大学多文化クラスの実践報告である。母語話者を交えた日本語教育現場のセッティングに「多文化クラス」という名称を与えることは、「留学生」対「日本人学生」という対立構図を覆し、多文化共生時代を迎えつつある教室外の現実にも迫るものである。本授業実践は 4 技能の組み合わせによって行われ、すべての言語活動は意味中心に組み立てられている。この実践が多文化共生につながる多角的な自己及び他者の理解を促していることは参加者のレポートの分析からも明らかである。従来上級者向けとされていたこのような実践は中級者でも十分可能であり、意味中心の活動を通して言語習得が起こる場になりうることは、データとして示した音声資料のスクリプトからもうかがえる。このようなセッティングをより効果的に仕組むことが、今後の実践における教師の課題である。

4. バイリンガル語彙マップを利用した理系専門語彙学習

高野知子（東京工業大学大学院生）、ジョイス・テリー、仁科喜久子（東京工業大学）

理工系高等教育機関に進学予定の日本語学習者が、専門語彙を効率的に学習できる方法として「バイリンガル語彙マップ」を利用した学習法の効果を検証した。「バイリンガル語彙マップ」とは、学習者の母語もしくは母語に準じる能力を有する外国語を「テーマ的かたまり」によって語彙を空間的に配置し、既習概念をネットワーク

にして作成したものである。本論文では、英語・日本語が対になったマップを使用し、高等専門学校に進学予定の都内日本語学校在籍の初級日本語学習者（非漢字圏のアジア・アフリカ各国出身）に対して記憶・再生課題を課すという実験を行った。語彙再生に関して分析した結果、マップ利用群の方が非使用群に比べて再生数平均が高く、マップに学習効果があることを確認した。

5. 独自の基準についての話し合い

河野俊之（横浜国立大学）・小河原義朗（北海道大学）

正しく発音ができる学習者は、必ずしも教師に教えられたわけではない、自分で考えた基準、すなわち、独自の基準を持って発音していることがわかっている。音声教育においては、その独自の基準を考えることを支援することが有効であると考えられる。そこで、本研究では、韓国語話者3名が話し合い、独自の基準を考える活動を観察した。その結果、1人で行う活動よりも、より深い自己モニターが行われていることがわかった。

●ポスター発表（上記5件を含む15件）

6. インタラク션을重視した初級から中級への橋渡し教材-理解から運用へ-の作成

笹原幸子・浅野悦子・寺下優子・長野ゆり・苗田敏美（金沢大学）

初級から中級への橋渡し教材を作成した。この教材は、主に海外で初級を修了した学習者をスムーズに中級に進級させることを目的としている。特徴は、トピックシラバスを採用したことと、インタラク션을重視した活動を多く取り入れたことである。また、初級後半の文法の復習も取り入れてその定着と運用力向上も図っている。特に、インタラク션을重視した活動を多く取り入れることによって、学習者一人一人が自ら発信し相互に学び合うことを目指している。各課は基本的に会話文と読解文から構成されており、巻末には「生活会話」も載せた。この教材を使うことによって、海外で初級を修了した学習者も、スムーズに中級に進級できるようになった。本発表では、この教材の内容を紹介するとともに、インタラク션による学習活動の例を報告する。

7. 語彙習得のための WebBT システムの開発 -自律学習の一助として-

隈本ヒーリー順子・金森由美・中溝朋子（大分大学）

現在、WebBT(Web-Based Training)上で利用できる語彙習得支援システムの開発を行っている。本システムは①語彙習得に特化していること②学習者自身が習得状況を把握し、学習計画を立てられるように工夫をしたこと③「掲示板」機能も持つことで、遠隔地学習者同士の協働学習を可能とすること④学習者の学習履歴を活用すれば語彙習得・研究に関するデータ収集が可能なことなどの特徴を持つ。

8. 漢字の造語能力に関する基礎調査

徳弘康代（早稲田大学）・川村よし子（東京国際大学）

漢字教育において、どの漢字をどのように提出するかは重要な意味を持つ。漢字は単漢字としてよりも単語の一部として用いられることの方が多いので、多くの語の構成要素となる漢字を学習することは効率的な漢字学習につながる。本研究では、使用頻度及び親密度の値に基づいて順位付けを行った漢字 2100 字について、各々の漢字を含む語の数を調べ、漢字の造語能力を調査した。調査には頻度及び親密度の高い漢字を含む語約 15000 語の資料を用いた。本発表では調査結果を報告するとともに、以下のことを提言する。1.漢字順位が高く造語能力も高い漢字は、初級で漢字を教えるだけでは不十分であり、中級以降にそれらの漢字を含む語彙についての学習が必要となる。2.漢字順位が高く造語能力の低い漢字は、覚えれば単独で使用できることから、早い時期に教えることが有効である。3.初級以降の漢字導入については、造語能力を考慮した提示順がその後の学習者の語彙習得に影響し、抽象的思考を伸ばす助けになる。

9. 「非情の受身」の日中対照研究-論文作成指導のために-

飯嶋美知子（早稲田大学大学院生）

日本語の論説文においては、「～される」などの受身表現が多用される。だが、中国語を母語とする日本語学習者は、論文作成時に受身表現を十分に使用できないことが多い。受身表現では、行為者よりも行為の受手を重視し、行為の結果がどうなったかが注目される。受手が非情物である「非情の受身」の場合は、感情は介在せず、受手が行為者の動作・作用を受けた結果が注目され、客観的事実が表されるため、論説文において使用されることが多いのである。「非情の受身」は、中国語の「能動文」と「無主語文」に訳されることが多く、受身のマーカーが明示される「被」構文に訳されるものは少ない。中国語を母語とする日本語学習者への論文作成指導の際は、受身表現が論説文に使用される理由を理解させるとともに、日本語と中国語では表現形式が異なることを認識させる必要がある。

10. 理工系専門日本語作文支援のための基礎調査-名詞・動詞共起の分析-

中野てい子（東京工業大学大学院生）・仁科喜久子（東京工業大学）

本研究は、日本語作文支援システム開発のための基礎調査である。留学生が作文をする場合、コンテキストにあった共起表現知識が不足するため、不自然な文を産出すると考えられる。このシステムでは、学習者が作文するときの目的にあった共起表現を知るための支援として、様々な言語資料から共起表現語彙を収集し、統計的手法を用いて学習者が利用できるようにするために基礎資料としての有効性の検討を行った。本論では学習者の作文支援のための共起表現の提示方法を示すために種々のテキストから共起表現を収集した結果、作文の目的によって共起表現を分類整理する必要があることがわかった。そこで、一分野として理工系論文を中心に分析した結果、この分野では他の資料に比較して、漢語動詞の割合が多く、共起する名詞の専門的概念によって限定された意味を示すことが明らかになった。

11. 誤用訂正のタイミングと授業参加者の意識

楊 帆（東北大学大学院生）

中国人日本語学習者の授業中の誤用に対して、教師がどのようなタイミングで訂正し、また、それについて学習者がどう受け止めるのかについて調べた。186例の訂正のうち、学習者の発話を遮断した訂正は半分以上を占めていることがわかった。しかし、インタビューと質問紙調査で回答した学習者の9割が、誤用の直後ではなく、一文が完全に終了してから訂正されたいと思っている。それは、話の流れを遮断されたら、戸惑ったり、緊張してしまったりするからだとして学習者に考えられている。一方、教師のほとんども一文の終了後に訂正した方が良いと思っているが、無意識のうちに学習者の発話を遮断してしまうことが多くあることが窺えた。どんなときに発話を遮断する訂正が多いのかについて分析したところ、「誘導」が使用されるとき、また、誤用が文の前部にあるときだということが明らかになった。無論、学習者の発話を遮断する傾向は、教師によって異なっていることもわかった。

12. 台湾普通高校の日本語教育の実情-9人の台湾人日本語教師のインタビューを通して-

黄 家琦（東北大学大学院生）

台湾の普通高校における第二外国語教育は10年間近く実施されているが、今でも多くの問題点が残っている。特に日本語教育の分野では、学習意欲の継続の難しさが数多くの先行研究に指摘されている。本研究は、台湾普通高校の教育現場に勤務している9人の台湾人日本語教師を対象にした面接調査の結果をまとめたものである。調査を通し、普通高校の日本語教師が考えた学習意欲低下の原因、学習意欲を維持させるために、普段どう工夫なされているのかを明らかにした。また、豊かな教授経験を持つ教師とそうでない教師の間に、授業を工夫する時、異なる傾向が見られた。経験の豊かな教師は学習者の目標の設定に手伝う工夫をしていることに対し、経験の浅い教師は、学習者に合わせようとする傾向が見られた。本研究の結果は、台湾普通高校の日本語教育の実情

を理解するための一つの手がかりになると思われる。

13. 質疑応答における話題のずれ-初級学習者によるポスター発表・質疑応答において-

管原和夫・高橋澄子（東北大学）

口頭発表後の質疑応答を母語話者とやりとりする接触場面と捉え、初級学習者が母語話者に対してポスター発表及び質疑応答を実施してきた。しかし、母語話者は発表に直接関連のない話題選択をし、雑談に流れる傾向が見られた。本稿では学習者の発表内容を充実させる事によって母語話者が質問の話題選択を発表内容に限定するという仮説を立て分析した。その結果、話題内容が充実したものの方が、雑談の傾向が少ないことが分かった。

14. ミニマル会話から広げる会話教育-会話の「観点」を意識的に学ばせる試みとして

増田真理子・本郷智子（東京大学）

昨今、日本語会話研究の成果を基に、ディスコースポライトネスの実現、終助詞の機能等が教育項目として注目されてきている。しかし、これらを学習者に「意識的に」学ばせることは、主に初級後半以降に行われるのが普通であり、早い段階での学習は一般的でない。これに対し、本発表では、これらを、むしろ文構造が複雑化する以前の初級最初期段階で日本語の高コンテキスト性を利用しながら集中的に扱い、その後の会話学習に有機的につなげていく方法を提案したい。

15. 留学生の対人的環境、特に同国人との交流について-愛媛大学の事例から-

高橋志野・向井留実子（愛媛大学）

浜田他(2006)の枠組みを用い、愛媛大学の日本語予備教育コース受講（修了）生（以下予備生）と学部留学生（以下学部生）を対象に学習環境の実態を調査した。その結果、どちらにも、同国人との交流が対人的環境で大きな比重を占めていることがわかった。しかし、同国人との交流を日本語学習に役立っているかどうかという点から考察すると、両グループの考え方は対照的であり、予備生-特に初級や初級修了レベルの者-は、同国人との交流が日本語学習に役立つと見なしているのに対し、中上級レベル以上とみなされる学部生は、同国人との交流を日本語力の向上とは無関係と考えがちであることが明らかとなった。

【午後の部】

●講演

演題：フィリピン日本語教育新時代

藤光由子 氏（前国際交流基金マニラ事務所日本語教育アドバイザー）

●口頭発表（5件）

16. 日本語教育への防災授業の導入-ALTを対象とした教育実習の中での試み-

田中典子・中島忍・服部明子・許惠雯（名古屋大学大学院生）

日本で生活する上で必要となる知識は、言語や文化だけではない。地震国日本ではだれもがいつ災害に見舞われてもおかしくない状況におかれている。日本で生活する日本語を母語としない人々は、被災時、日本語能力が十分でない、地震についての知識や経験がないなどの理由で情報弱者になる危険性をはらんでいる。そこで、私達は日本語教育における防災教育の重要性を認識し、日本で働く ALT (Assistant Language Teacher) に視点をおいた防災教育に取り組んだ。具体的には、日本語コースのなかへの防災授業の導入、および防災センターの体験コースへの参加である。学習者の既有知識を把握し、防災に対する意識の変化をみるためにコース開始時と防災授業終了後にアンケートを、また防災センターでの体験の後インタビューを行った。本稿では以上の一連の取り組みについて報告し、日本語教育機関はもちろん、企業や地域など、外国人を受け入れる側のネットワーク作りの促進と防災教育の組織的な計画・実施を提言する。

17. 日本語教育におけるモーダルの助動詞「らしい」の取り扱い

齊藤学（帝京大学）

モーダルの助動詞「らしい」については、意味的に類似する「ようだ」等の意味・用法と対照され、これまで非常に多くの研究がなされてきている。しかし日本語教育において、「らしい」を他の類似形式とどのように関係づけて取り扱うか、また具体的にどのように導入し、練習するかといったことについては、これまであまり本格的な議論がなされてこなかった。本研究では、教科書や教師用指導書等での「らしい」の取り扱いを概観し、今後日本語教育において「らしい」を如何に扱ったらよいかについて検討する。

18. 日本語初級学習者のためのプロジェクトワーク導入の試み

後藤典子・澤恩嬉・山上龍子（山形短期大学）

山形短期大学留学生別科では、日本語学習者の総合的なコミュニケーション能力を向上させるため、日本事情の時間においてプロジェクトワークを取り入れている。来日まもない初級学習者を対象に学習者一人一人が自由に教室外活動を計画し行う「自由プロジェクト」と教師側が課題を提示し活動を行う「課題プロジェクト」があり、いずれも個人的な活動として実施している。ここでは、その活動の特徴など実践報告を行う。

19. 留学生センターにおける地域主導型プログラムの試み

大石寧子（徳島大学）

徳島大学留学生センター（以下センターとする）では、設置された当初から方針の一つに「地域との連携」を掲げてきた。地域との連携には、地域の①国際化への啓発②異文化理解への手立て③共生・協働の3つの視点が必要と考え、これまで地域に対しこの3つの視点からの働きかけを行ってきた。センター設置後4年目の今年から、センターが行っていた「日本語サロン」をボランティアが運営することになった。従来は、センターが運営した企画に地域が参加して留学生と交流するという形のもので、ボランティアグループが自分たちの人脈やノウハウを生かして企画・運営し、教員がそれをサポートする形に変わった。ここに至るまでのセンターの方策とこれからの考察したい。

20. e-learning におけるメールを使った学習支援（メンタリング）について

－『WBT AOTS 日本語コース』の場合－

藤本かおる・前坊香菜子・児島秀和・春原憲一郎（海外技術者研修協会）

eラーニングを含む遠隔教育では、モチベーションの維持と学習継続の困難さがある。ここでは、企業研修生のeラーニングでのメールを使ったメンタリング方法について報告する。効果的なタスクやメール送信の工夫などを考察する。

●ポスター発表（上記5件を含む15件）

21. 聞き手を意識した「話す」活動の試み－中上級クラスにおける「研究紹介」の事例から－

仁科浩美（山形大学）

近年の「話す」教育では、談話や文体、ポライトネスの指導などが盛んに行われてきているが、本研究では聞き手への配慮という問題をとりあげる。本研究では、中上級の研究留学生を対象にしたクラスで試みた「自分の研究について－1）同じ学部の専門外の教員に資料を持ちながら説明する、2）一般の日本人にパーティーで説明する」という2つの口頭活動について報告する。授業では、個々の学習者にピア及び日本語教師からの建設的意見・提言、そして、一般日本語母語話者から理解度についてのフィードバックが与えられた。研究内容に対していつも紋切り型の応答しかしていなかった学習者も、この活動を通し、同じトピックであっても、目的、聞き手との背景知識の質的・量的差、状況・場面により違いがあることを認識し、それにより情報の要求度、一般化、

親近感といった配慮が必要であることに気が付くことができた。

22. 「にとって・に対して」の混用に関する一考察

猪又礼子（北海道大学大学院生）

「にとって」「に対して」は、日本語学習者が混同し誤用を犯しやすいことが先行研究で指摘されている。しかし、それらの誤用の要因は判明しない。そこで、本研究では、「にとって・に対して」に関して、日本語学習者は具体的にどのように理解し産出につながっているのか、その実態を明らかにする。調査では、①自由作文による短文作成、②使用語彙を指定した短文作成、③「にとって・に対して」の選択、④「にとって・に対して」以降の後件選択、および、それらのテスト結果をもとにインタビューを行った。その結果、①述部が[対義語を持つ形容詞]だと[対比]の意味で捉えられ、「にとって」を使用すべきところに「に対して」を用いる可能性があること、②「に対して」には「冷たい印象」という語感を持っていること、③「にとって」は前接する名詞に[ヒト]が、「に対して」は[モノ・コト]が想起されることが多いこと、以上の3点が産出に影響を与えている可能性が示唆された。

23. 自由産出調査から見る中国人日本語学習者の共起知識

-形容詞および形容動詞と名詞との共起表現について-

曹紅荃（東京工業大学大学院生）・仁科喜久子（東京工業大学）

本研究は共起表現の産出という視点から、学習者と母語話者の共起知識の特徴を考察するものである。中国人日本語学習者67名と日本語母語話者69名を対象に、連想の形式をとった共起表現産出の調査を行った。基本名詞70語を刺激語として提示し、共起する形容詞か形容動詞を記述してもらうことにより、大量かつ自然なデータを入手する。そのなかの形容詞および形容動詞が名詞の修飾語になる共起表現に焦点を当てて分析した。量的には、母語話者の異なり表現数が2234であるのに対して、学習者の正用表現数は1656で母語話者との差が大きい。質的には、学習者の誤用表現357を分類した結果、語と語の組合せが意味的に不自然である誤用が42%でもっとも多く、統語的な使用に関しては品詞の混同による形容動詞の誤用や形容詞の用法上の制限による誤用が目された。

24. 中国人日本語学習者の音声単語認知におけるアクセントの関与

袁秀杰（北海道大学大学院生）

中国人日本語学習者にとって、聴解が難しい原因の一つに、単語処理過程における単音あるいは語認知ができないという問題がある。近年、日本語の音声単語認知では、東京方言話者がアクセント情報を積極的に活用していることが明らかになっている。しかし、日本語学習者の場合はどうであるかについては検討されていない。そこで、本研究では、日本語学習者はどのようにアクセントを利用し、単語認知過程でどのように語彙選択を行ったかについて、中国人日本語学習者8名を対象に、パイロットスタディーを行った。その結果、学習者が2拍目の時点で日本語母語話者と同じような確率で、アクセントを利用し、語彙選択を行う傾向が伺えた。

25. 陳述副詞と文末表現の共起関係-「きっと」「かならず」「ぜひ」を出発点として-

田中里実（北海道大学大学院生）

本研究では文末表現との共起関係の観点から、日本語の陳述副詞「きっと」「かならず」「ぜひ」の用法の違いについて考察する。先行研究ではこれらの副詞は文末との共起関係、またはモダリティの階層性のモデルに基づいてその性質が分析されてきた。しかしながら、これらの副詞を分析する際に、モダリティの階層性モデルの適応は困難である。そのため、本研究ではカール・ビューラーの「言語機能の三角形」を基にしたモデルを使用し、文末表現の表現類型を叙述、呼びかけ、表出の3つに分類する。そして、このモデルを基に陳述副詞「きっと」「かならず」「ぜひ」を分析する。

26. 日本語教師のキャリア形成：非常勤の事例について

ヤマモト・ルシア・エミコ、押谷祐子、遠藤清佳（東北大学）

本研究は日本語教師がどのようにしてキャリアを形成していくのかを、事例研究を通して調べた。B 県内の国公立大学と民間日本語学校に勤める 23 名の非常勤日本語教師を対象にして、彼らが持つ職歴パターンを勤めている機関別で調べた。その結果、4つの日本国内でのキャリア形成のパターンが見られた。そして、これらのパターンには共通して民間日本語学校から経験を積み重ねるという傾向が見られた。換言すると、民間日本語に勤める教師は教師歴が浅く、年齢が低い。一方、大学に勤める教師は教師歴が長く、年齢が高いことが分かった。今後、男女別に分類し、性役割とキャリアとの関係を詳細に調べる予定である。

27. 日本語中・上級学習者の辞書使用の実態と問題点

障子上晃子（北海道大学大学院生）

本研究は、日本語中・上級学習者を対象に辞書使用に関する調査（以下ユーザー研究）を行ない、日本語中・上級学習者の辞書使用の目的と学習者が指摘する既存の辞典の問題点について明らかにするものである。はじめに学習者用辞典とユーザー研究に関わる背景を概観し、本研究の目的、研究の方法、予備調査について述べる。アンケート用紙による調査を行い、調査の結果、日本語学習者用辞典を使用するという回答は被験者から得られなかった。一方で、全ての被験者が 2 言語辞典（対訳語辞典）を使用しており、使用の目的は意味と用例を調べるためであった。また、学習歴 5 年以上の学習者においては、1 言語辞典（日本語-日本語辞典）が使用されており、使用目的は意味、用例、書き方（漢字、ひらがな、カタカナ表記）を調べるためであった。また、問題点としては、2 言語、1 言語辞典において同様の回答が見られ、日本語学習者の使用に配慮した辞典が求められていた。

28. ディベートを通して上級トピックについて話せるための指導の問題点

清水昭子（立命館アジア太平洋大学）

中級の学生が上級へ行くための手がかりとして上級トピック（経済関係）でのディベート指導を行った。指導を振り返り、当初の目的を達成できるための問題点を検討した。発表では、そのうち論文作成にもつながる立論形成の問題点と最終的に中級学生がはなす態度発話量の増加が見られたが、表現の正確さや複雑さに関して進歩が見られなかった点について考察し、学習者同士の活動と教師の指導の兼ね合いについて検討する。

29. カジュアル会話、なぜ教室で扱うか、どう教えるか-研究留学生に対する会話教育の一環として

増田真理子・本郷智子・中村かおり（東京大学）

教室で学習するいわゆる「丁寧体」は学習者の生活ではあまり観察されず、進んで日本のコミュニティに入っていくには「カジュアル会話」の習得が必要だと認識している学習者が年々増えてきている。こうした状況を受け、本発表では「カジュアル会話」を学習項目と捉えた教育の必要性を提案し、実践について報告する。

30. 外国にルーツを持つ児童・生徒の教育支援へのニーズ-山形県村山地域での調査をもとに-

森亜沙美（東北大学大学院生）

この研究の目的は、外国にルーツを持つ子どもが日本で学び、生活するうえで、何を必要としているのかを明らかにすることである。結果から、外国人児童と生徒のニーズには異なる傾向があることがわかった。学習面で特に、中学生は母語による日本語指導や学習補助を求める傾向が強かった。外国人生徒からの多くの要望から、彼らはより多くの深刻な問題を抱えていることが窺える。さらに、精神面での支援では、中学生が、相談相手として同じ国出身の友人を求める傾向や母語教室を求める傾向も明らかとなった。しかし両者とも、自分と同様のルーツを持つ友人と出会うチャンスを求めていることが共通していた。

【昼食について】

会場内と向かいの博物館内にレストランがございます。それ以外のお店は少々離れておりますのでご注意ください。会場内は飲食可ですので、お弁当を持参していただいても結構です。飲み物の自動販売機は会場内にあります。

【懇親会】

後片づけ終了後に会場内のレストラン「ラ・フォーレ」で懇親会（会費 3,000 円）を行います。是非ご参加ください。

【会費納入のお願い】

2006 年度の会費（3,000 円）が未納の方は早急にお支払いいただきますようお願いいたします。2 年未納の場合は会員資格を失いますのでご注意ください。会費は、研究会会場受付にてお支払いいただくか、郵便局にて以下の口座にお振込みください。会費振込口座は電信振込しかご利用いただけませんのでご注意ください。ご不明な点がおありでしたら、jlem@ryu.titech.ac.jp まで email にてお問い合わせください。

【振込先】 記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会

【会場案内】

仙台国際センター 所在地 〒980-0856 仙台市青葉区青葉山無番地
022-265-2211（代表）

【会場までの交通】

公共交通機関をご利用ください。<http://www.sira.or.jp/icenter/jikokuhyo.html> にバス時刻表がございます。

・仙台駅から

*バス：仙台駅前発 所要時間約 10 分。料金 180 円。

- ・乗車 仙台駅西口バスプール 9 番乗り場より下のいずれかにお乗りください。
「動物公園循環（青葉通・工学部経由）」
「宮教大・青葉台」
「宮教大」
「宮教大・成田山」
- ・下車 「博物館国際センター前」でお降りください。

*バスと徒歩：上と同じバスに乗車し、大町西公園下車（100 円）、徒歩 10 分弱。
広瀬川にかかる橋を歩いて渡り、会場に到着します。

*タクシー：仙台駅より所要約 7 分。

・仙台空港から

*バス：エアポートリムジンバス（片道 910 円，往復 1,640 円）で仙台駅まで移動後，バスかタクシーをご利用ください。

*タクシー：通常 6,000 円程度かかりますが，あらかじめ「稲荷タクシー（tel:022-241-1122，<http://www.inaritaxi.co.jp/>）」をご予約の上，ご利用なされると割安です。

【会場への地図】



(<http://www.sira.or.jp/icenter/access.html> より転載)

【開催校からシンポジウムのご案内】

翌 9/24 (日) 午後 1 時より仙台市内において「言語研究者・言語教育者養成プログラム」の活動の一環として「第 2 回海外日本語教育事情国際シンポジウム」を開催致します。参加費無料，どなたでもご参加していただけます。詳しい情報は，<http://www.sal.tohoku.ac.jp/nik/20060924.html> にごございます。こちらもぜひご参加ください。